

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

中国系ニューカマー大学生の言語発達と
学力形成に関する一考察

広 崎 純 子

中国系ニューカマー大学生の言語発達と 学力形成に関する一考察

広崎 純子

要 旨

本稿では、中国系ニューカマー第二世代の大学生4名を事例として取り上げ、幼少期から大学までの学校経験を通じての学力形成に、言語の発達がいかに影響を及ぼしているのかを明らかにする。その際、「伝達言語能力」と「学習言語能力」の習得、伸長（あるいは喪失）の学力形成への影響に着目した。その結果、第二世代の大学生の場合、幼少期の早い時期に「伝達言語能力」では日本語が優位になり、日本語での「学習言語能力」を育成していき、それを基盤として学力形成がなされているが、その背後には、数学的な思考方法や論理構成といった側面における学習上の困難が存在する可能性が示唆された。

1. はじめに

本稿の目的は、中国系ニューカマー第二世代の大学生の、幼少期から大学までの学校経験を通じての学力形成に、言語の発達がいかに影響を及ぼしているのかを明らかにすることである。ニューカマーの子どもたちの学業達成の低さはしばしば指摘されるところであるが、その説明要因の一つに言語（学校言語と母語（継承語）との関係）が挙げられる。「言語」は、子どもたちが日本社会に参入して最初にぶつかる障壁であり、そこで、その壁をうまく乗り越えられるか否かが、その後の学力形成や進路選択に大きく影響してくると考えられる。

ニューカマーの子どもたちがかかえる教育課題は、志水編（2008）により以下の六つに整理されている。すなわち、「不就学」「適応」「言語」「学力」「進路」「アイデンティティ」である。これらのそれぞれの課題については、研究成果が積み重ねられてきてはいるものの、複数の課題を関わりあるものとして取り上げてきた先行研究は少ない。筆者は、中国系ニューカマー高校生の進路意識と進路選択に関する研究（広崎 2007）において、国境を渡ることにより言語という資源が無効化され、言語を基盤とした学力の育成が継続してなされないことが、ニューカマー生徒の進路選択上の障害になっていることを指摘した。すなわち、「言語」が学力形成と進路選択の分岐に大きく関係していると考えられるのである。「言語」に焦点を当て、ニューカマーの子どもたちの学力形成のあり様を問うことは、かれらの抱える困難の解明に必要とされていると言えよう。

2. 先行研究の検討と本稿の課題

ニューカマーの子どもの「言語」に関わる問題として指摘されている点は、二点にまとめることができよう。第一に、「伝達言語能力」と「学習言語能力」の問題、第二に、「母語」の重要性である。以下、順に見ていきたい。

第一の点に関しては、欧米の第二言語習得研究を整理した Baker によると、子どもの言語能力は「伝達言語能力 (BICS : basic interpersonal communicative skills)」と「学習言語能力 (CALP : cognitive/academic language proficiency)」に区別して捉えることができ、前者は1, 2年で獲得されるが、後者を獲得するには5から7年かかるとされる (Baker 訳書、1996、pp.167-170)。つまり、表面的には流暢に日本語を話しているように見えるニューカマーの子どもでも、教科学習に参加するための「学習言語能力」を身につけておらず、学力形成に躓いている子どもが多くいるであろうことが予想される。

第二の「母語」の重要性に関して、Baker は、「子供の第二言語における能力は、すでに第一言語で獲得した言語能力のレベルに依存している。第一言語が発達し

ているほど、第二言語も発達しやすくなる」と述べている（Baker 訳書、1996、p.167）。このような指摘を踏まえ、太田（2000）は、母語能力に応じた日本語教育の必要性、すなわち、「母語の識字能力の不十分な低学年齢児に対しては、母語教育を優先しながら日本語指導を進めること」、「母語能力が一定程度確立している子どもにはその能力に見合ったレベルの日本語教育を実施すること」の必要性を主張し、母語は、子どもの識字能力、認知発達、アイデンティティの確立という人間的成長にとってもその保持・伸長が不可欠であり、それゆえ、母語教育が必要とされるとしている（太田、2000、pp.187-188）。

ここで、母語とは何かについて確認しておこう。Skutnabb-Kangas（1981）は、母語を以下の四つの側面から定義している。第一に、「最初に学ぶ言語」、第二に、「最も習熟している言語」、第三に、「最も頻繁に用いる言語」、第四に「アイデンティティ形成の言語」である（Skutnabb-Kangas、1981、p.18）¹。このような観点から見ると、言語形成期（2-15歳）にある子どもの場合、特に、言語形成の分水嶺があるとされる9-10歳以前に来日した子どもの場合（中島、2010、p.22）、第二および第三の観点に関わる「最も習熟し」「最も頻繁に用いる」言語が、日本語に置き換わる可能性が高い。更には、日本生まれの子どもの場合、第一の観点「最初に学ぶ言語」までも日本語であるケースもあろう。本稿では、「母語」を第一の観点、すなわち「最初に学ぶ言語」という意味で用いる。

さらに、「言語」と「学力」の関連について言及した先行研究に宮島（1999）があるが、そこでは、「学習言語能力」の不足や「母語」の喪失のみならず、「歴史文化語」の存在が、子どもたちの学習の障害となっていると述べられている（宮島、1999、pp.143-153）。日本社会日本文化において自明とされている知識の希薄さ等が、子どもたちの学力形成を阻んでいることも看過してはならない。

以上の先行研究を踏まえ、本稿では、ニューカマー二世世代の若者の言語発達

¹ 太田（2000）が、重要性を指摘するのは、第一および第四の観点に関わる「根源的な文脈」における母語である（p.167）。

と学力形成の関連について解明することを試みる。対象とするのは、高校進学率や大学進学率が低いとされるニューカマーの中でも、日本人と同等に進学を果たしているとされる、中国系ニューカマーの女子である。国勢調査を基にした分析から、ニューカマーの進学率を算出した大曲他（2011）では、「中国人女子については、日本で高校3年間を過ごすという条件さえ整えば日本人と同等またはそれ以上の割合で大学に進学する」（p.33）ことが明らかにされている。では、彼女たちは、どのようなプロセスを経て大学進学を実現させたのだろうか。そこには、言語に関わる課題とその他の課題がどのように関連し合い影響を与えているのだろうか。ニューカマーの中でも成功していると見なされる層を対象とすることで、成功の要因を探ること、更には、その陰にある彼女達の抱える困難や課題を探ることが本稿のねらいである。

以下では、大都市圏の中堅私立大学外国語学部在籍する中国系ニューカマー第二世代の大学生を対象とし以下の問いに答えることを通じて考察していく。

- (1) どのようなプロセスを経て、継承語（中国語）と日本語における「伝達言語能力」と「学習言語能力」を身につけていったのか。
- (2) 継承語（中国語）と日本語における「伝達言語能力」と「学習言語能力」の習得、伸長（あるいは喪失）は、学力形成にいかに関与しているのか。

3. 調査の対象と方法

本稿では、2015年1月から3月の間にインタビュー調査をおこなった中国系ニューカマー第二世代の大学生（女子）4名を対象とする。中国系ニューカマーと一言で言っても、その歴史、来日経緯は「中国帰国者」「留学」「就労」「国際結婚」等多岐にわたる。本稿では、親世代の本国（中国）での階層差や日本での滞在展望等の差を最小限にとどめるため、親世代が就労（留学からの就労を含む）目的で滞日している者を対象とした。

インタビューは、一人当たり 2 時間から 3 時間、半構造化の方法でおこなった。聞き取りの項目は、成育歴、学校生活、使用言語、親の教育への態度、母国とのつながり、友人関係、進路選択、将来展望等である。聞き取った内容は、許可を得て全て IC レコーダーで録音し、文字起こしをおこなった。

分析にあたっては、録音した逐語録をエピソードに区分し、エピソードを幼少期から大学（現在）までの時系列に配置した上で、ライフストーリーを構成する、という手順を踏んだ。

4. ケースの報告

調査対象者の概要は、表 1 に示した通りである。4 名は、いずれも日本生まれまたは就学前に来日しており第二世代にあたる。名前はいずれも仮名である。

＜表 1：ケースの概要＞

仮名	学年	専攻	出生地	国籍	父母	きょうだい	父の言語	母の言語	来日	小学校	中学校	高校	日本語指導	入試区分
メイリン	2	中国語	日本	日本国籍 申請中	中国・中国	なし	日本語	日本語		日本	日本	日本 (進学校)	なし	一般
ミカ	2	国際コミュニケーション	日本	中国	中国・中国	妹	日本語 (親は日中)	日本語 (親は日中)	日本語	日本	日本	日本 (中堅、特 進コース)	なし	公募推薦
マナ	1	国際コミュニケーション	中国	日本	中国・中国	妹、弟	日本語 (親は日中)	日本語 (親は日中)	日本語	5歳	日本	日本 (進学校)	なし	一般
カモン	2	国際コミュニケーション	中国	中国	中国・中国	なし	中国語	中国語		6歳	日本	日本 (進学校)	小2まで日 本語教室 通級	一般

* 学年は、インタビュー時

【事例 1：メイリン】

メイリンは、両親との三人家族である。父親は留学生として来日し、日本で就職し、結婚。メイリンは、日本生まれで、出生後すぐに母の里帰りに伴い中国でしばらく過ごした後、日本に戻り保育所に通い始めると日本語を話し始めるようになった。メイリンの場合、母語は日本語であるといえよう。父親が日本の大学院を卒業していたということもあり、家庭内で両親がメイリンに話しかける言語は日本語で、その後もずっと日本語優位、中国語は簡単な単語やフレーズの聞き

取りのみで育つ。

両親もずっとわたしに対して日本語で小さい頃からずっとしゃべってたので、そのあとはずっと日本語でした。あと、保育所とかも入ってたせいで。(略)あと、すごい簡単な、「シーザオ(お風呂)」とか「チーファン(ご飯)」とか、わかりますか。そういう言葉だけなせか中国語で、「シュアヤー(歯磨き)」とか、混ぜてましたね。「早くシーザオして。」とか「チーファンだよ。」とか。なんか、混ぜた感じで、でも、ほとんど日本語で、けんかとかも、難しい言葉とかも、全部日本語で話していました。

父親は、メイリンの幼い頃は、中国語のテープ教材を用いて中国語を学習させようと試みはしたものの、簡単な発音だけで継続的なものではなく、小学校の頃には中国語学習を続けることはなくなり、小1から小4まで英語教室に通っていた。数年に一度里帰りをしていたが、滞在は数週間、中国の親戚との会話は、両親が通訳をしていた。

(中国に帰った時に(親戚の)みんなと話せるように、うちの中でせめて普通話だけでもちょっとは勉強させようっていうのとかはなかったんですか?)

たぶんなかったんでしょうね。もう日本へ帰ってきたらずっと親も日本語で話しかけてたし、特に、多分、それより、英語を目指してたんじゃないかなと思います。まさか、わたし、大学で中国語専攻に入るとは思ってなかったんで、結構英語の方に力入れてて、だから、中国語は別にみたいな感じだったと思います。

小学校は、地元の公立小学校で、特別な日本語指導を受けることはなかった。「伝達言語能力」としての日本語は、就学前に身につけていたと考えられる。読書好きで図書館の本を借りてよく読んでいて、国語が好きな教科の一つで、教科学習を日本語で進めることに困難はなかった。だが、理系科目は苦手、算数では計算問題はできるが、小5くらいから、文章題となるとどう解いていいのかわからないという状態だった。

簡単な計算とかはいいんですけど、応用問題とか、考えるのになるとどうしてもいやだになっていう。

(文章題ですか?)

そうですね。そういう。

(文章読んでて、何言ってるかわかんないとか、そんな感じ?)

いや、読むのはわかるんですけど、なんたる、どう計算すればいいのか、答えまでの導き方がよくわかんない感じですかね。

(それは、何年生ぐらいからそんな感じでした?)

5年生ぐらいですね。ちょっと数学が難しくなった頃。

子どもの発達段階において、9歳頃に「具体的思考」から「抽象的思考」への壁(境目)があると指摘されるが(箕浦、2003、pp.269-270)、メイリンも算数でこの壁にぶつかっており、日本語における「学習言語能力」の確立において、若干の躓きがあったと見ることもできるのかもしれない。それでも、成績は、中の上くらいを保っていた。

中学は、地元の公立中学校に進学。得意な教科は、音楽、体育、国語で、マンガが好きでよく読んでいて、苦手な教科は、理科と数学だった。父親は、メイリンが苦手な数学の勉強を見てくれる等教育熱心であり、メイリン自身も勉強は頑張っており、取り組まなければいけないものだと思っていた。家庭内言語はずっと日本語で、中国語に触れる機会は全くなく、中学校時代を過ごした。

高校は、地元の公立進学校に一般入試で進学した。名前が中国名なので、入学式の呼名の時から目立つが、普通に日本語が話せるとわかると、周囲はみんなと同じような態度で接してくれた。理系科目が苦手だったこともあり、高校3年の時には、迷わず文系に進んだ。成績は中の上くらいで、英語の発音がとても上手な友だちに触発され、英語の勉強は頑張っていた。将来は英語を使った仕事に就きたいと思っており、当初は、国公立大の外国語学部に進学したいという気持ちもあったが、理系が苦手なため断念し、私立大を目指した。高2の終わり頃から予備校に通い始め、受験勉強に励んだ。もともとは英語専攻を志望していたが、不合格で、母の助言で滑り止めで受けた中国語専攻に合格したため、大学では、

中国語を専攻している。将来は中国語の通訳になりたいと思っているが、子どもの頃から、日本語を優先させて育ってきたことに関しては、後悔しているという。

わたしが今少し後悔してるのは、やっぱり小さい頃ずっと日本語で育ってきて、強いて言えば楽しんで育ってきたので、今結構、逆に苦勞して、中国人なのに中国語あまり話せないってなって、なってるので、やっぱり、親には中国語も継続して話して、小さい頃から話してほしかったなっていう気持ちがあります。(略)わたしも、ちょっとそれで後悔してるので、今(中国語の勉強に)苦勞してるので、もしわたしが結婚して子ども産んだら、どっちも(=中国語も日本語も)小さい時から身につけさせたいなって思ってます。

【事例2：ミカ】

両親と6歳年下の妹との四大家族。ミカの両親は、留学のため来日し、そのまま日本で就職し、結婚。ミカは、日本生まれ。保育園に通い始めた頃、保育園での使用言語は日本語で、家庭内言語は中国語だったことが負担だったためか、話し始めるのは遅かったそうである。心配した母親が保健所に相談したところ、どちらか一方の言語で話しかけるようアドバイスされ、親は日本語を選択。それ以降、ミカの使用言語はずっと日本語であり、家庭内で親が話す中国語はだいたいわかるが、中国語を話すことはない。ミカの場合も、母語は日本語であるといえよう。入学した小学校では、特別な日本語指導を受けることはなかった。ミカのケースも、メイリン同様、小学校入学時には、日本語での「伝達言語能力」を身につけていたと考えられる。小学校の頃は、算数と歴史が苦手科目で、成績は中くらいだった。

2, 3年に一度は中国へ行き、1, 2週間滞在していたが、その間の親戚との会話は両親が通訳してくれた。日本在住の親戚はいなかったが、近所に中国人家族が住んでおり、中国人コミュニティが開いている中国語教室に小3から小6までの4年間、週一回通っていた。

小学生の時に、近所の家の、同じような境遇の人たちと一緒に、中国語教室っていう小

さいクラスを開いて、どこかの親が先生をやってくれて、それを週一でいつも通ってました。(中略)正直辛かったです。行きたくないなあっていう気持ちで、でも、わたしの母親は、わたしに「身体だけ持って行きなさい、耳だけ持って行って、宿題とかはとりあえず置いといて、とりあえず教室に通いなさい」っていうふうに言って、その通りに通ってたらだんだん面白くなったりして、それで、今はまあまあ聞けるようになって、当時通ってよかったなあって思ってます。

その教室のおかげで、ピンインを見て読めるくらいの力は身につく、中国語を聞く力もついたので通っていてよかったと思っているが、それ以外には中国語に触れる機会はなく、両親がたまに中国語で話しかけてきても答えるのは日本語で、中国語はしゃべれず、両親に中国語を教えてもらうこともなかった。

中学校の時は、国語と英語の成績がよく、数学が苦手。数学は、計算は得意だが、文章題が苦手だった。

中学高校の計算系の問題は結構好きで解けるんですけど、文章題ですね、苦手だったの。特に証明の問題があったり、あと確率を計算する問題が、高校時代もそれが苦手で、確率の問題の時は、自分で数えられる問題だと、自分でもう一から数えたりして、それで、地道に答えを求めたって感じです。

成績は中の上で、5段階で4と3が多かった。ミカの場合も、数学に関しては留保が必要かもしれないが、中学生の頃までには、概ね日本語における「学習言語能力」を身につけていたと考えられる。中学生の頃も、やはり、近所に中国人家族が住んでいて、中国語教室が開かれていたため、2年から3年くらい通い、小1か小2程度の読み書きを中心に勉強し、教授言語も中国語だったためリスニングの力も身についた。中国語の勉強は負担で辛かったが、親には間接的に中国語を勉強してほしいということ言われていた。

(中国語を勉強してほしいと言われることは)直接はあんまりなかったとは思んですけど、中国語勉強しないと、勉強すれば、第二言語として今後活躍できるみたいな話をすると、その話が盛り上がったたり、間接的にそんなふう言われている気がします。

中国語の力は、日常会話レベルで、特に両親の話す中国語なら聞くのは大丈夫で、話すのはピンインがあれば話せるレベルで、何も見ずに自分から話すのは難しく、読み書きもピンインがあればできるが、漢字だけでびっしり書かれてしまうとわからない単語が多すぎて全然分からなくなるというレベルだった。

高校は、地元の中堅公立校に一般入試で進学し、3年生から特進クラスに入った。高1の時は、国公立大学に進学することを希望していたが、理数系があまりにも点数がとれず、特に、数学が苦手だったため諦め、高2からは文系に進み、国語と英語を集中して頑張った。英検と漢検の受験に積極的に取り組み、高校在学中に、英検二級と漢検二級に合格した。

高2の頃から、大学見学に行き、大学での専攻は、実用性を考えて、英語を選んだ。大学では、言語系の科目を多く履修している。

(言語に興味がある理由はなんですか。)

実際にその、もどかしさとか違い、もどかしさを体験しているからこそ、違いをもっと分析したいって思います。

選択外国語で中国語を履修する以外に、中国語専攻の必修の中国語文法のクラスを聴講で受けさせてもらい、中国語検定三級に合格。中国語の授業は、リスニングは簡単だが、文法は辛いと感じている。留学生が多くいるサークルに所属しているが、サークル内でのコミュニケーションは日本語である。中国からの留学生と交流する機会が多いが、中国語をもっと身につけようと触発されることはないという。

それ(=中国語をちゃんと勉強しようかなという気持ち)は特に、このサークルでは起きないです。逆にあきらめの方にいってます。逆にことばの壁を感じてしまって、サークルに行くこと自体が苦痛に、もう、前、なりかけて、それで、授業の中だけで、自分が取る科目の中だけで、中国語習得しようとは思いました。

中国語の授業は取り続ける予定で、商業レベルの中国語まで身につけたいと思っている。操れる言語は、日本語・英語・中国語の順で、大学入学後も中国へ行っ

たが、買い物の値段交渉程度の中国語ができるのみで、基本的な中国語のレベルにとどまっている。

【事例3：マナ】

父、母、妹、弟の五人家族。マナの父親は中華料理店のコックで、調理師学校を卒業後、仕事のために来日し、数年後日本で結婚。マナの母親は出産のため中国に帰国したため、マナは中国で生まれた。仕事が安定するまで、子育ては祖父母に任せるという親の方針のもと、マナは、5歳まで父方の祖父母のもとで育てられ、弟が生まれたのを機に、来日し、それ以後日本で育った。父親が働いている中華料理店は、母親の親族の経営するチェーン店で、母方の親族の多くが日本に在住している。来日後は、当時3歳の妹と0歳の弟とともに保育所に通った。それ以後、家庭内の言語も日本語になり、3、4ヶ月で日本語が話せるようになったという。マナの場合、母語は中国語であるが、来日した年齢が5歳と幼かったため、わずかに数カ月で日本語での「伝達言語能力」を身につけ、その後も年齢相応に日本語を伸長させていったと考えられる。

すぐに保育所に入れられたんですけど、でも、そんなすぐに、勉強してからこっちに来たんじゃなくて、5歳だからこっちに来てからどうにでもなるでしょって感じで連れて来られたので、ほんとに最初は、しゃべれない状態で、投げ入れられて、もう、どうやって言葉を覚えたかは、もう、あんまり覚えてないんですけど、でもたぶん、日常会話が中国語から全部日本語になったんですよ。(中略)たぶん習得したのは、お母さんの話からすると、3、4か月ぐらいだったらしいです。完全に日本語がしゃべれるようになるまで。すごい早かったらしくて、びっくりしたって言ってました。

家庭内での両親間の会話は中国語で、親の子どもたちへの語りかけは日本語七割中国語三割程度だった。弟は全く中国語がわからず、妹も早い時期に中国語を忘れてしまっていたが、マナ自身は親の話す中国語を解していたし、頻繁に電話で話す中国の祖父母とも中国語で会話をしていた。母語である中国語の「伝達言

語能力」も保持されていたと考えられる。保育所が終わった後、両親の経営する中華料理店で過ごしていたのも、中国語を忘れなかった理由の一つではないかとマナ自身は考えている。

わたし達小さい時、保育園終わったら、お店にいたんですよ、ずっと。その、お店にいる時は、従業員が全員中国人なので、もちろん従業員同士は中国語の方が楽じゃないですか。だから、ずっと中国語しゃべってるから、たぶん、それもあったので、あまり、わたし、忘れなかったのかなって思います。完全に離れてたわけじゃないので、

保育所に1年弱通ったあとは、地元の公立小学校に入学した。小学校では、特別な日本語指導はなく、在籍学級で授業を受けていた。小学校の頃は、図書館の本を読み尽くすくらい読書が好きで、そのためか国語が好きな教科だった。苦手なものは特になく、算数が嫌いだったが、成績は概ね上だった。

小学校低学年とか中学年とかまでは、特に苦手とかはなかったんですけど。たぶん小学校は苦手はなくて、ただ数学は嫌いでした。苦手ではないけど数学嫌いで感じてたね。

(数学嫌いは、数学の何がそんなに嫌いでした?)

え、何が嫌いだったんだろう?わたし関数が嫌いなんですよ、もうずっと。だから、それ、関数から、もう嫌だもう嫌だってなりました。

マナは、小学校のかなり早い段階で、中国語よりも日本語の方が得意になっていたという。算数が嫌いではあったものの、身につけた「伝達言語能力」を土台に日本語の「学習言語能力」も育成していったものと考えられる。

親は、中国のドラマが好きで、家にいる時にはずっと中国のドラマを流しており、マナも親と一緒にそのドラマを見るのが習慣化していた。ドラマには中国語の字幕もついているため、中国で教育を受けてはいないが中国語を読むことができるのも、そのおかげではないかと思っている。中国語保持に対する親の態度は、しゃべれた方がいいだろうが、本人の意思次第というものだった。

小学校の時は、「中国語下手だな」という自覚があったが、小5の時と中1の時

に、中国からの編入生がいて、その通訳を務めたことから、中国語がだんだん使えるようになっていったという。また、中2の12月に、姉妹都市である台湾台南市への親善大使の派遣があり、そのメンバーに選ばれ台湾を訪問した。中国語を話せるのが一人だけだったため、台湾の中学生との交流会の時などに多くの参加生徒から通訳を頼まれたりもし、そこでも中国語を使う機会を得た。中学校の時の成績は、上よりの中、数学が苦手な以外は概ね良好だった。

高校は、地元の公立進学校に一般入試で進んだ。勉強面では、中学の時から一貫して国語と英語が好きで、数学が嫌いで、数学に関しては、「何言ってるのかさっぱりわからない」というレベルだった。それでも、いところが有名私立大学に進学したこともあり、小さい頃から大学はいいところにはいかなきゃいけないものなんだと思って育っており、大学進学は家族（親族）の中で自明視されていた。数学が苦手なため、国公立大学は諦めざるを得ず、中学の時から決めていた外国語系の私立大学を受験することにした。高校生の時は、周囲に中国語を話す友人がいなかったため、中国語の力は落ちたが、英語と中国語を比べると中国語の方が力が上だったという。高校在学中に中国語検定二級に合格している。大学で英語を専攻している今も、英語よりも中国語の方が得意であるという。中国語で書くことができないことから、ちゃんと中国語を勉強しなきゃいけないと思い、大学では選択科目の中国語を履修した。中国語の文法を間違えて使っていたと気づかされることもあり、履修してよかったと思っている。

マナの場合、母語である中国語の「伝達言語能力」の保持の度合いは、家庭内外の周囲の環境に依存していると考えられる。先述のように、マナは、小学校のかなり早い段階で、中国語よりも日本語の方が得意といえるようになっていたことから、母語である中国語の「伝達言語能力」に第二言語である日本語の「伝達言語能力」が依存していると考えられるよりも、両者は、それぞれに独立して使われる場面や相手に応じて、発達していったのではないかと考えられる。

【事例 4 カモン】

父、母との三人家族。カモンは一人っ子で、中国で生まれた。カモンが3歳の時に父親が仕事のため来日し、カモン自身は6歳の時に母親と一緒に来日、その後ずっと日本に在住している。父親は大学の時に日本語を学習したことがあり、来日時に少し話すことはできたが、カモンと母親は全く話せない状態での来日だった。来日後は、しばらく保育園に通い、その後小学校に入学した。保育園では日本語がわからなくて一人で遊ぶことが多かったが、自然に少しずつ日本語を身につけていった。家庭内の言語は、カモンが中国語を忘れないようにという親の思いがあり、ずっと中国語を保持している。カモンの母語は中国語である。

小学校は、地元の公立小学校に入学し、その後、転居に伴い何度か転校している。入学した小学校には小2の途中まで通い、そこでは日本語教室があり、週に数回、日本語を教わっていた。小2の途中で転校した後は、担任の先生が時々日本語を教えてくれたりしたが、日本語教室はなく、クラスメートと一緒に在籍学級で授業を受けていた。一学年一クラス20人程度という小規模校で、カモン以外にも中国から来た児童が5,6人いて、周りの人に聞かれない内容等は中国語で話すこともあり、6年生の時に中国語を話すのをやめるように先生に怒られたことがあるという。

放課後は小4の頃までは学童に通い、小3の頃から近所の中国人が教えてくれる英語の教室と、中国語の教室にそれぞれ週に一回通っていた。中国語教室では、小学校1年生のテキストから始め、小学校3年生のテキストまで用いて読み書きを習い、作文の宿題も毎回あった。作文の宿題をする時には、どんな表現を使うのがよいか、親と一緒に考えてくれた。また、親が買ってきてくれた中国語の物語の本を読んだり、親から漢字を教えてもらったりすることもあり、中国の時代劇が好きで、テレビでそれを見たりもしていた。

それ(中国語教室の勉強)は、よく見てくれました。わたし、作文は、やっぱり中国の小学校は行ってなくて、漢字は全くやってなかったので、その、いろんな中国語の表現とか、

作文を書く時は、すごい四字熟語とかたくさん使って、高度な作文を書くんですけど、それがわからなくて、親に聞いて、こういう四字熟語使った方がいいんじゃないとか、結構一緒に考えてくれたり、教えたりもしてくれました。

(じゃあ、その中国語の教室で勉強する以外に、うちで親に中国語を教えてもらったりはしましたか。)

時々あったと思います。そんなに多くないんですけど、休日、時間があつたりする時は、漢字を教えてくれたりとか、本を買って来てくれて、中国語の物語とかを読んだりとかしました。

その頃、学校の授業でも作文を書かされることがあつたが、中国語で書くよりも日本語の方が得意だったという。

(その頃は、自分では、日本語と中国語だとどっちの方が得意でした?)

日本語だったと思います。結構、中国語の作文で苦勞する、すごい苦勞するんですけど、日本の授業で、作文、すごい書かされることがあるんですけど、すごい得意で、何十枚とか、作文用紙が、わりと他の子に比べてもすごい書けたと思います。

家庭内言語は中国語で、中国にいる親戚とスカイプで話したりすることもあつたが、両親との中国語の会話はわかるものの、親戚の話す中国語はわからない単語があつたりすることもあり、話すことにおいても、小学校3、4年の頃にはもう、「日本語の方が話せるかもしれない」という感じになっていたという。来日して、3年程度で日本語の「伝達言語能力」を身につけている一方で、中国語での「伝達言語能力」の方は保持していたものの、年齢相応には伸びてはいなかったのではないかと考えられる。勉強では図工が好きで、国語と算数が苦手だった。国語では敬語、算数では掛け算で躓いたが、成績は概ね中の上くらいだった。小5からは、中学受験のための塾に週二回通うようになり、私立中学を受験したが、結果は不合格で、地元の公立中学校に進学した。

中学では、勉強は、最初は理科と数学が好きで嫌いな教科は特になく、成績は中の上くらいだった。国語では、学年一位をとったこともある。中2から英検受

験のための塾に通い始め、学年があがるにつれ、英語が好きになっていき、中学在学中に英検二級に合格した。また、中3の夏から塾に通い始め、高校受験を考え始めるようになると、英語をもっと勉強できる高校に行きたいと思うようになり、公立の進学校の外国語科に一般入試で進学した。カモンの場合、小学校では、勉強で躓いたこともあったが、中学校を卒業する頃までには、日本語での「学習言語能力」が身につけていたのではないかと考えられる。

高校では、勉強は英語が好きで、世界史が苦手、成績は真ん中くらいだった。その頃まで一貫して家庭内言語は中国語で、中国語をもっと覚えるように、父親が中国の映画のDVDを買って来てくれて、見ることもあった。高校生頃の中国語は日常会話は話せる程度のレベルで、自分でも頑張って話そうとしていた。

大学では、英語を勉強したいと思い、国公立大学の外国語学部を受験した。受験勉強では、数学の問題を父親に聞いたりすることもあり、その時には、問題の解説だけでなく、勉強の仕方からいろいろと教えてもらったりもした。そういう時、父親とは、中国語でやり取りをしており、中国語の「学習言語能力」もいくらかは身につけていたと考えられるのかもしれない。

勉強、数学の質問を聞いたら、すごいずっと、一個聞いたら十個返ってくるじゃないですけど、すごい、その問題の解説よりも、勉強の仕方からもういろいろ話し始めちゃって、そういうことですかね。

(そういうのを話す時は、お父さんとは何語で話してらんですか。)

父はずっと中国語で話していますね。わたしも中国語で返したりします。時々「はい、はい」とかは日本語とかで、「もういいよ」とかも日本語で返したりします。

受験した国公立大は不合格で、私大の英語専攻に進むこととなった。大学では、中国語の授業も履修し、また、中国語検定のための勉強もして、三級、二級と合格し、準一級まで受験した。今現在、得意な言語は、まず日本語で、日常会話なら英語よりも中国語の方が上だが、難しい単語となると中国語よりも英語の方が知っている単語も多いという。大学では、留学生と中国語で話すこともあり、そ

んな日には、家に帰ると親に「中国語しゃべれるようになったね」と言われることもあるという。だが、自分の言葉の能力に関しては、「中途半端」だと感じている。

全然、すごいだろって思う気持ちはなくて、逆に、全部が中途半端だから、将来、もし、そういう、言葉を使った仕事をする時に、例えばメールを送るにしても、中国語で打てないし、難しい単語も書けないし、通訳とかでも、やっぱり完璧には訳せない。どの言語もまだ全然まだ足りない、すごい中途半端だなんてすごい思います。

5. まとめ

本稿では、中国系ニューカマー二世世代の4名を事例として取り上げた。4名の言語発達を見てみると、「中国語を忘れないでほしい」という親の思いから家庭内で使用する言語が中国語だったカモンを除いては、「日本で生活をしていくのだから」という理由で、親は中国語よりも日本語を優先させている。日本生まれのメイリンとミカの場合、母語は日本語である。それでも、どの家庭においても、両親間での使用言語は中国語であり²、メイリン以外は、両親から子どもへの語りかけの言語も一部か全部かの差はあれ中国語であった。また、メイリンの場合は、テープ教材を用いて中国語の発音練習をさせられており、ミカの場合も、中国人コミュニティの運営する中国語教室に通い中国語を学んでいる。親の言語である中国語を身につけてほしいという親の思いはあるものと思われるが、目の前の子どもの忙しさ（勉強・部活・習い事・塾）等から、年齢が上がるにつれて諦めていくように思われる。一方、マナの場合は、家で中国語のドラマを見たり親族との交流の中で中国語を使う機会があったり学校で中国語の通訳を務めたりする機会があったりし、母語である中国語に触れる機会は保持されていた。カモンの場合は、先述の通り、「中国語を忘れないでほしい」という両親の願いから家庭内で

² メイリンの場合、両親間での使用言語は標準語（普通話）でなく、出身地方の方言である。

は母語である中国語が保持されていた。それでも、2名とも、来日後数年で「伝達言語能力」において日本語の方が優位になっている。

本稿におけるケースに即して言えば、ニューカマー二世世代の子どもたちの言語発達は、母語が日本語であるケース（メイリン、ミカ）については、就学前に日本語の「伝達言語能力」を身につけ、それを基盤に学校生活を通じて日本語の「学習言語能力」を育てていったと考えられる。一方、母語が中国語である2名は、中国語の「伝達言語能力」も保持していたものの、意図的に母語である中国語より日本語を優先させたケース（マナ）、母語である中国語を保持しようとしたケース（カモン）ともに、結果としては、「伝達言語能力」は日本語の方が優位となり、学校での教科学習を通じて、日本語で「学習言語能力」を育てていったといえよう。カモンの場合は、大学受験時に父親から数学を中国語で教わっていたということから、中国語における「学習言語能力」も身につけていたと考えることができるのかもしれない。

学力に関して言えば、いずれのケースも、日本語の「学習言語能力」を基盤として、学力形成がなされている。本稿で取り上げたケースは、4名と少ないのであるが、4名に共通していることは、読書好きで国語が好きな教科の一つであったという点である。その一方、カモンを除く3名は、理数系、特に、数学（算数）の文章題（特に、確率、証明、関数等の問題）が苦手であったと語っている。算数の問題を解くためには、数学的な思考方法と論理構成のもとで数量や図形についての概念、法則等を理解し、計算したり測定したりするといった技能を身に付けていくことが求められる³という。仮説的な提示しかできないものの、メイリン

³ 文部科学省ホームページ、「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について（最終報告）小学校編」、「教科志向型」JSLカリキュラム「算数科」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/015.htm
また、中学校の数学の授業に参加するためには、最低限、「類推する」「帰納的に推論する」「演繹的に推論する」「理想化・抽象化する」「一般化する」「特殊化する」「図・表・式・グラフに表現したり、よみとる」「発展的に考える」という8つの「数学的な考え方」が必要とされるという（文部科学省ホームページ、「学校教育におけるJSLカリキュラム（中学校編）-数学科-1. 数学科の基本的な考え」）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/06/1235807_001.pdf

とマナが、具体から抽象へと思考方式が移行するとされる「9歳の壁」と言われる時期に、数学で躓いていることから、日本語の「学習言語能力」の発達が十分にはなされなかったのではないかということが推測される。ここに、宮島(1999)の指摘する「歴史文化語」とは異なる側面における学習上の困難を見てとれる。それでも、4名とも、小中学校の成績は中の上以上であり、高橋(2009)に指摘されている、2000年以降の日本生まれ/幼少期に來日した児童に見られる、授業についていけないレベルの学習言語能力の未発達(p.19)と呼べるような状態には陥っていなかったものと思われる。むしろ、勉強のことについて煩く干渉してくる教育熱心な親から受け継いだ向学校的な態度や、勉強はやらなきゃいけないものという勉強に対する積極的な姿勢等は、小・中学校での順調な学習と高い学力形成につながっているものと考えられる。

高校進学については、4名とも中堅校あるいは進学校に進んでいる。鍛冶(2007)の「就学以前から日本にいた者は3割以上が高校に進学できていない」(p.337)という指摘は、今回のケースには当てはまらない。むしろ、大学進学までが幼い頃から家庭内で口に出すまでもなく自明視されており、4名とも苦手な理数系を避け文系に進み、得意な英語と国語を生かして大学受験に臨んでいる。ミカが公募推薦で受験したのを除き、3名は一般入試で大学受験しているのであるが、大学入試は多様化してきており、英検や中検の合格が推薦入試において有利に働くこともある。親の学歴の高さが、子どもたちの学歴取得にもプラスに働いていると考えられ、志水他(2013)が指摘する階層の問題(p.201)を看過してはならないであろう。

大学進学後は、滑り止めで中国語専攻に入学したメイリンのみならず、英語を専攻しているミカ、マナ、カモンも、それぞれの能力に応じた中国語の授業を履修しており、また、中国人留学生の多く所属するサークルに参加するなどして、中国人留学生と交流する機会を自発的に作っている。本稿では触れなかったが、そのような交流が自己のアイデンティティを見つめ直すきっかけとなっている

ケースも見られた。「(言葉が通じない) もどかしさを体験しているからこそ、違いをもっと分析したいって思います。」と言語を専攻している理由を語る一方で、「(中国語をちゃんと身につけようということに関しては) あきらめの方についています。」と語るミカに端的に表れているように、彼女らが中国語の力を日本語と同じレベルまで引き上げるには、相当の努力が必要とされるのであろう。家庭において、あるいは小・中・高校で、英語教育一辺倒でない外国語教育、具体的には、それぞれの発達段階に応じた継承語(中国語)教育がなされることが望ましい。だが、それを補完するものとして、グローバル化が叫ばれる大学教育において、多様な背景を持つ学生のニーズに応じた高度な外国語教育を提供していくことも求められているのではないだろうか。

本稿では、日本生まれあるいは就学前に来日した第二世代のみを取り上げたが、学齢期に来日したケースも存在する。来日年齢による違いについても検討することを今後の課題としたい。

【参考文献】

- Baker, Colin, 1993, *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon : Multilingual Matters (=1996、岡秀夫訳、『バイリンガル教育と第二言語習得』、大修館書店)
- 広崎純子、2007、「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択—支援活動の取り組みを通じての変容過程—」、『教育社会学研究』(80)、pp.227-245
- 鍛冶致、2007、「中国出身生徒の進路規定要因」、『教育社会学研究』(80)、pp.331-349
- 箕浦康子、2003、『子供の異文化体験 増補改訂版—人格形成過程の心理人類学的研究—』、新思索社
- 宮島喬、1999、『文化と不平等—社会学的アプローチ—』、有斐閣

- 中島和子、2010、『マルチリンガル教育への招待－言語資源としての外国人・日本人年少者－』、ひつじ書房
- 大曲由起子他、2011、「在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育－2000年国勢調査データの分析から－」、『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』(8)、pp.31－38
- 太田晴雄、2000、『ニューカマーの子どもと日本の学校』、国際書院
- 太田晴雄、2002、「教育達成における母語と日本語－日本語至上主義の批判的検討－」、宮島喬・加納弘勝編、『変容する日本社会と文化』、東京大学出版会、pp.93－118
- 志水宏吉・清水睦美編著、2001、『ニューカマーと教育－学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる－』、明石書店
- 志水宏吉編著、2008、『高校を生きるニューカマー－大阪府立高校に見る教育支援－』、明石書店
- 志水宏吉他編著、2013、『「往還する人々」の教育戦略－グローバル社会を生きる家族と公教育の課題－』、明石書店
- Skutnabb-Kangas.T, 1981, *Bilingualism or Not, The Education of Minorities, Multilingual Matters*
- 田垣正晋、2004、「中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか：脊髄損傷者のライフストーリーより」『社会心理学研究』第19巻第3号、pp.159-174
- 高橋朋子、2009、『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー－母語教育から継承語教育へ－』、生活書院

※ 本稿は、平成27年度神田外語大学研究助成「多言語を背景に持つ学生の言語発達とキャリア形成」（個人研究）による研究の成果の一部です。